



英國の子供小説

オリバア・ツ井スト (第四)

永代美知代

乞食娘のナンシーが悔い改めて、これまでの罪亡ぼしのためにオリバーに同情を寄せるやうになつたことは、前號に記した通りである。ところが、猶太人はナンシーの素振りを疑つて、ノアといふ男に言ひつけて、ナンシーとブラウンロー氏との話を立聞きさせた。さうして、その翌朝早くに、例の押入強盗から歸つ

て来たビル・シツケスに、猶太人がナンシーの事を話すと、シツケスは眞顔になつて怒つた。突然ナンシーを打つて、泣いてあやまるのも聞かず、床の上へ投げつけた。と可哀いさうに、ナンシーは無惨な最後を遂げてしまつた。

だが、悪黨達の舞臺もこれでおしまひになつた。この時は已にグラウンロー氏の方から手が廻つて居た。警官の姿を見るなり散々ばらばらに逃げ出した。二三日間市中を上手にもぐつて隠れ廻つたシツケスも、遂には捕へられて、ナンシーを殺した罪で死刑を宣告された。猶太人も見付かつて、これはシツケスの共犯と、他に澤山の餘罪で同じく死刑に處される事になつた。この間に、グラウンロー氏は自分で探偵を使つて、モンクとオリヴァアと二人の身の上になにか關係があつて、モンクが秘密書類を猶太人に預けたらしいのを知つて居た。そこで、いよいよ猶太人が斷頭臺に立つて云ふその前の晩、グラウンロー氏はオリヴァアを連れて監獄を見舞つた。猶太人に訊きたゞして、是非モンク

の素性と書類の行衛を知らうためなのである。

「若旦那も御一緒に御座いますか。」

「監守は品の好い立派な二人を見て、斯う訊いた。」

「さう。是非逢はせる必要があるのですね。」

二人は無氣味な廊下を並んで歩いた。

「ビークもよくやつた。何だオリヴァア! はつくは、

甘くやつてやがら。」

彼方の方で斯う獸の吠えるやうな聲が聞える、これは猶太人が半狂亂になつて、一生涯の幻影にうなされながら、怒鳴り散らして居るのであつた。

「吃驚なすつては不可ません。」

「監守は少年の手を執つて注意した。」

「俺をこんな目に合はせやがつたのはオリヴァアだ、彼

奴のお蔭だ、馬鹿者奴が、何を愚圖を々々してやがるんだ、早くオリヴァアを連れて來んか、糞! 畜生奴!」

獸のやうな聲は引續いて聞えた。「猶太人」と監守は

呼び掛けた。「貴様に面會人があるんだ、確乎しろ!」

「面會人? 誰だい、爺、爺、よばく爺!」

「確りしろつてば、何か訊きたい事があるさうだから、正直にお答するんだぞ。」

「ヤ! 打殺せ、何だつて此處へ來やがつたんでい? 畜生!」

オリヴァアの姿を見付けると猶太人は叫んだ。

「静にしろ!」と監守はグラウンロー氏を振り向いて、

「お尋ねなさいたい事がおありなら、早くお訊き下さい、猶太人の奴狂氣になつちまいますから、どうぞお早く。」

「お前は書つけを持つてるだらう、モンクから預つた書類は何處に置いてるんだ?」

「知るもんか。」

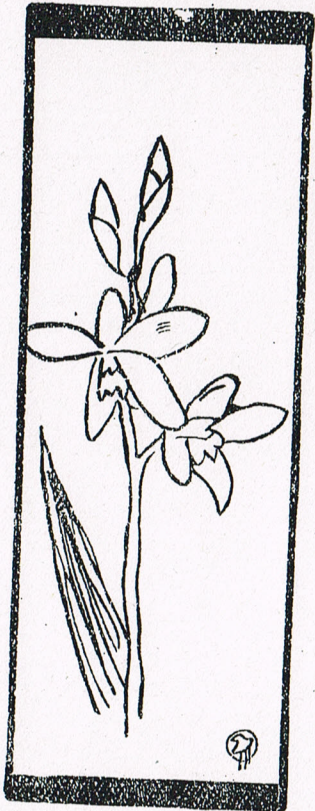
「此場になつて隠したつて仕方があるまい、どうぢや、尋常に白状してくれないか。」

「オリヴァア!」と猶太人が呼び掛けた。「貴様だけに云

つて聞かさうよ、此處まで出て來い。」

のしかゝるやうな身振をする。

「恐かありませんから。」グラウンロー氏に小聲で云つ



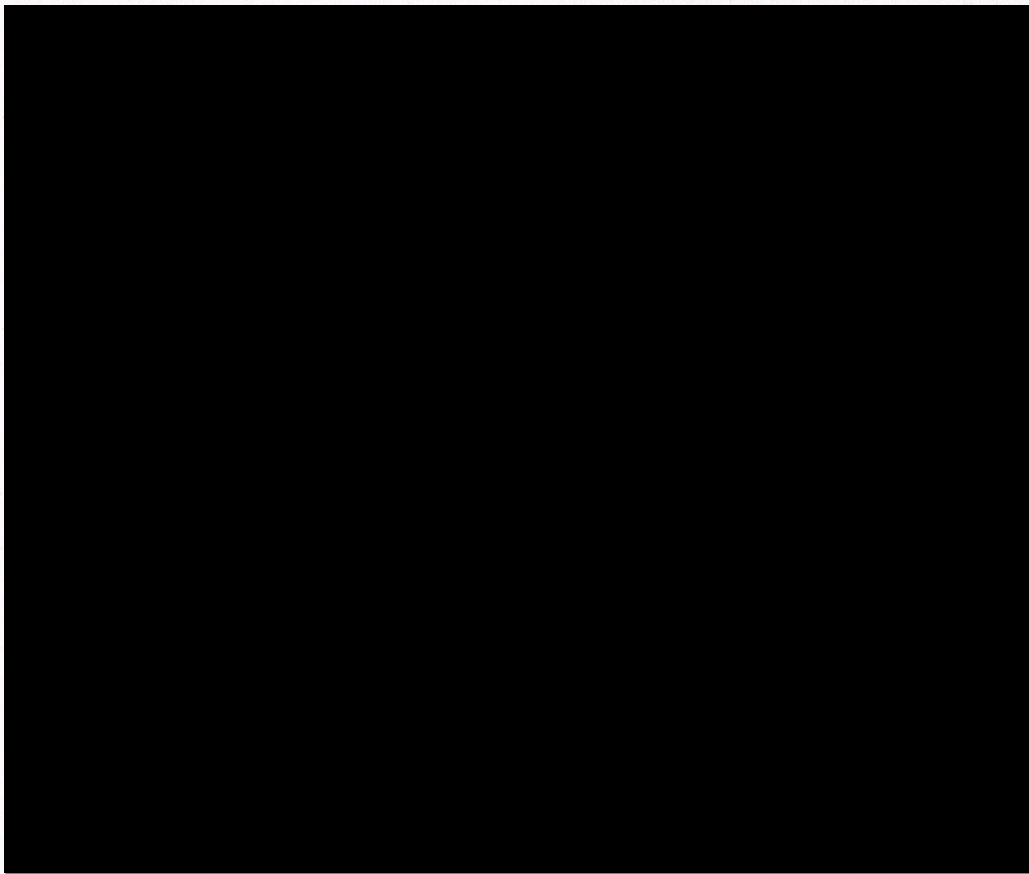
のが解つた。つまり、グラウンロー氏がモンク兄弟の亡父と友達であつた關係から、萬事斯うした自白をさせる事が出来た。

今一つ不思議な祕密が明らかになつた。それは、ローズ嬢がオリヴァの亡母の妹で、オリヴァの叔母に當ると云ふ事である。この悦しい事を聞いたオリヴァは、心から叫んだ。

「僕は決して叔母さんとは云はない、姉さんだ、初めて出合つた時からさう思つてるんだもの、姉さんだ！ 僕の大好きな姉さんだ！」

この二人の孤子は、淋しい涙を忘れた。大勢の立派な友達にとりかこまれて、その後長く楽しい生涯を送つたのである。

(をばり)



て、オリヴァは傍へ寄つた。

「オリヴァ、書つけはな上の部屋の煙筒にあらあ、俺あ貴様にだけ云つて聞かすんだ。」

そして猶太人は役人達もオリヴァの云ふ事なら何でも聞いてくれるに相違ないから、是非命を助けてくれろと歎願する。

「神様にお祈をなさい、どうぞ罪を悔い改ためて下さい——」オリヴァは祈り出した。「お、慈愛の神様、この悪人をお免し下さい——」

「冗戯ぢやない！ 馬鹿にしてやがらア。」

「もう何もお訊きになる事



はありませんか。」

「ありません。」

三人は外へ出た。牢の戸が閉る音がして、獸のやうな唸聲がする。グラウンロー氏は今一度猶太人が正氣に歸れば好いと思つた。

書類は煙筒の中に隠されてあつた。それで見ると、オリヴァは立派な生れで、莫大な不動産を父から遺されて居ることが解つた。のみならず、同時にグラウンロー氏の探偵の手で捕つたモンクは、オリヴァの腹達しの兄弟で、遺産を獨占にするつもりで、猶太人を儲つて彼の弟を殺さうとした